

21J-pm18

薬剤師の職能としてのアスリートへの服薬支援

○中島 理恵¹, 安部 恵¹, 小沼 直子¹, 女淵 翔太¹, 須賀 夏子¹, 亀井 美和子¹ (¹日本大薬)

【目的】アンチ・ドーピング活動は、もはやスポーツファーマシストのみならず、薬剤師の職能の一つとして求められている。本研究では、全国の病院もしくは薬局に勤務する薬剤師を対象としてアンケート調査を実施し、薬剤師が直面しているアンチ・ドーピング活動の実態を明らかにし、今後薬剤師がより充実したアスリートへの服薬支援を実現するための方策を考察する。

【方法】調査は構造化質問票を用いてインターネットを介して無記名で実施した。調査項目は、回答者の基本事項、スポーツファーマシストの認定の有無、回答者のアンチ・ドーピング活動に関する経験、行動とした。本研究は、日本大学薬学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】841人の薬剤師より回答を得た。回答者のうち180人(21.4%)、スポーツファーマシストではない薬剤師でも135人(18.7%)が過去にアスリートからドーピングに関する相談を受けており、その際の情報の入手先は、Global DROのサイトが33人(18.3%)、JADA(日本アンチ・ドーピング機構)の禁止表が106人(58.9%)、自身の薬理学の知識で判断が23人(12.8%)であった。全回答者のうち399人(47.4%)が「ドーピングの問い合わせを受けた際の対応を知らず、自信をもって対応できない」と回答した。

【考察】本研究の結果、スポーツファーマシスト以外の薬剤師もアスリートドーピングに関する相談を受けていることが示唆されたが、その半数が情報を提供する際にJADAの禁止表やGlobal DROといった推奨されている情報源を使っていないことが明らかになった。今後はスポーツファーマシスト以外の薬剤師に対してもドーピング相談に関する最低限の対応方法を周知させることが必要である。